

保育の現場から

雪に暮らし、

雪と遊ぶ子どもたち

伊藤克実



冬の訪れ

園庭の白樺の木々の葉が冷たい風に舞い散るころ、札幌にそろそろ冬が訪れます。早い年で十月下旬には初雪を見ますが、気候変動のためか、最近はなかなか予測がたちません。初雪は一度融けますが、その時期を境に冷たい雨やみぞれが降る荒れた天気が続き、本格的な冬を迎えます。何度かの降雪の後、根雪となつて札幌は春まで雪の中の生活となります。

その期間は約五か月になるほどの長さです。札幌の子どもたちは雪と暮らし、雪に親しみながら成長していると言つていいかもしれません。

雪は自然の恵みでもあります。約百九十万を超える札幌市民の水源地は、周囲の山々に堆積した雪の雪解け水ですから、本当に貴重な資源です。しかし、一方で、わずか一晩に降り積もつた雪でも、現代の特徴である車社会の機能をマヒさせるに十分な威力を発揮することがあります。このように札幌という都会の中で

生活するうえで、雪が支障を生むことが多いのも事実です。

雪への備え

雪が降り積もるころ、保育園に通う子どもたちの様相は一変します。二歳になったM君は登園してくる友達の内、真つ赤な耳やほっぺを見て、「寒かった？（ぼくの）手、あつたかいよ」と声をかけていました。季節の変化を敏感に感じとって、子どもたちは言葉を行き交えます。車での登園が多い昨今ですが、Kさんはいつもソリに二人の子どもを乗せて、顔を真つ赤にして引つ張ってきました。保育園そばにある公園の雪を踏みしめながら登園する姿に、母親のたくましさを感じられました。

雪が降ると、保育園生活の必需品は一気に増えます。子どもたちは分厚いスノーウェア（防寒着）を身にまとい、足元は長靴や防寒靴と脚絆、そして毛糸の帽子と手袋が必需品です。全部身にまとった子どもた

ちは、まるで宇宙飛行士のような着ぶくれ状態になり、雪道を散歩に出かけていきます。長い冬の期間に何度も気温が変動します。暖気で緩んだ雪道は、次の日の寒気でいっぺんにスケート場のようにツルツルとなり、転びそうになりながらの散歩です。寒くても暖かくても、散歩から帰ってきた子どもたちのスノーウェアは当然濡れていますから、玄關脇の乾燥室には何人もの子どもたちの服がぶら下がっています。これが冬の風物詩です。

除雪機、大好き

ひと冬に何度か「ドカ雪」が降りますが、どんな大雪でも避難路は確保しなければなりません。子どもたちの逃げ道を除雪するのが園長の日課です。

当保育園の園庭に面して乳児から二歳児のクラスが並んでいます。そのクラスに沿って、避難路となる道幅を除雪機で除雪するのですが、その様子を窓越しに子どもたちは見えています。子どもたちは雪跳ねを見る

のがとても大好きです。乳児クラスの子どもたちは、除雪機のエンジン音が「ポツ、ポツ、ポツ」と聞こえてくると、窓際に寄ってきて保育者の膝の間にちょこんと座って見ていたり、雪が吹き上がって園庭に散る様子をつかまり立ちで見守ってくれたりします。一歳児のクラスでは、窓際に子どもたちが集まり、「園長先生、がんばって」の保育者のエールに声をそろえてくれることもあります。

降雪量が増すと、町内各所で雪が堆積し始めます。除・排雪した雪は随所に山となり、道路はしだいに狭まってきます。このため、二月中ごろに、町内全体で除雪大作戦が行われます。二日がかりの除雪大作戦は大型の除雪車で道路の雪を根こそぎ取っていくほどの迫力で、そのはぎ取った雪を積んだトラックが何度も保育園の前を行き交います。園庭で遊んでいる子どもたちはフェンスにしがみついて、その様子を見るのが大好き。そして見終わると、スコップとバケツを持ってきて「雪のお仕事なの」と雪運びや雪を掘るの

に懸命な子どもたちです。

雪を感じる子どもたち

雪は子どもたちにいろいろな感覚を与えてくれるようです。年に何度かある大雪の時、雪は煙るように静かに、そして間断なく降り続きます。そうすると街はなぜか無音の世界となってしまう。園舎内の窓から、保育者と子どもたちが空から落ちてくる雪の流れを見ていて、「すごいね、今日は早くお迎えにくるかもね」と話しています。吹雪の日は、雪の量もさることながら、大きなうねるような音が、子どもを少しばかり、不安にします。しかし、風がいつしか止み、雲間から青空が見え始めると、子どもたちに笑みが戻ります。積もったばかりの雪はフワフワです。子どもの足ではとても踏むことができないうらい厚く積もった雪は、真綿のようです。この雪の上にゴロンと転がって手足を伸ばし、とても気持ちよさそうな子どもたちです。また湿り気のない雪はサラサラな感

じ。あらればバラバラ。

雪は保育者の言葉を介して、子どもたちの中に音をもつものとして、イメージされていきます。また暖気の日が重なると、雪はしだいに融け始め、園庭の土が顔をのぞかせます。そんな時は子どもたちのお尻は土で真つ黒に汚れてしまいます。そして、また雪が降つて積もり、手がかじかむほどの寒い日々が続くと、雪はしつかりと固くなります。子どもの手でスコップを使って雪穴を掘ろうとしても、齒が立たないことを子どもたちはすぐにわかります。このように子どもは外の世界の変化を敏感に感じとり、雪の性質と寒暖の差を身体で覚えるのです。

ドンドト焼き

ドンドト焼きは正月十四日に家の正月飾りや絵馬を持ち寄つて焼き、その年の無病息災を祈つたという日本各地に伝承されてきた伝統行事です。当保育園でも一月中旬に、各家庭からお正月飾りなどを持ってきてもら

い、園庭で行います。園庭の中心に直径2m、深さ50cmくらいの雪の穴を掘つて、お飾りやお札を焼きます。穴の周りを子どもたち全員が取り囲んで、飾りやお札が燃えて立ち上がる煙を身体に引き寄せ、今年の健康を祈願します。また煙を頭にかけると賢くなるといふ言い伝えがあり、子どもたちに声をかけると、両手でパタパタと頭のほうへ煙をかけています。間もなく小学校に進む子どもたちへはみんながかけ、賢くなるようにと声かけて励まします。

雪と遊ぶーソリ滑り

北国の子どもたちの遊びの第一に挙げられるのは、ソリ遊びです。当保育園でも、子どもたちの年齢に応じたソリ遊びが行われています。

一歳児クラスの子どもたちはソリを引つ張るのが大好き。ソリに氷や雪玉で作ったおにぎりをたくさん乗せて園庭内をお散歩します。また、自分たちより小さな乳児の子どもを乗せて「うんこらしょ」と引つ張つ

て得意げです。四歳児の子どもたちは、近くの公園に降り積もって足跡のない雪の上を、全員で踏み固めて築山にたどり着き、山の上から米袋で作ったソリで滑り降りることに挑戦します。ソリはプラスチック製のソリだけでなく、ビニール製の米袋にダンボールを四角に切って入れて作った手製のソリを作って遊びます。また三歳児クラスの子どもたちは、築山から青いビニールシートの上に乗って滑り降りるのが大好きです。ゴミ袋もソリ代わりになりますし、スノーウエアのまま滑る尻滑りもよくする遊びです。

保育園の近隣だけでなく、年長の子どもたちは、保育園から歩いて二十分ほどの公園に手製のソリを持って滑りに何度も出かけます。公園は全体が大きな山となっていて、近隣の小学校のスキー学習が行われる所です。スキー学習の時は山の片側を使ってソリ滑りをして遊びます。山にはところどころに突き出た所もあって、そこをソリで滑り下りるスピード感とスリルが子どもたちには楽しいことです。

色水遊び

夏に絵の具を溶かした色水遊びをしますが、これを雪の上でもすることがあります。園庭の雪は赤や黄色、青色などに彩られてとてもきれいなものです。二歳児の子どもたちが、絵の具を溶かして作った色水をまいて遊んだ時のことです。一歳児の子どもたちが「い、れ、て」って言ってきたので一緒に遊びました。赤や黄色になった雪をスコップでバケツに入れて「りんごだよ」「みかんですよ、たべて」と見せてくれました。

雪中運動会

札幌の冬のイベント「雪祭り」の時期に、保育園ではミニ運動会を開催しています。保育園のそばの公園の雪を年長組の子どもたちが踏み固めて会場作りです。乳児の子どもたちを年長の子どもたちがソリに乗せて引きながらのかけっこや、ボールを雪の中から拾い、バケツを持って逃げ回る保育者を追いかけてその

バケツに入れるゲームなど、毎年保育者が知恵をしぼって競技を考えます。乳児の子どもたちは早く保育園に戻りますが、残った子どもたちは声援を送りながら最後まで参加しています。終わった後はみんなで甘茶を飲んだり、ココアを飲んだりします。

冬の動物園

卒園式を終えた子どもたちは最後の行事として円山動物園に出かけます。冬の動物園は人影もまばらで貸し切り状態です。地下鉄に乗って、歩いて三十分ほどで到着。暖かな国に住んでいる動物たちは、ほとんどが飼育舎の中から見るができます。むっとした生暖かな園内に入ると子どもたちは鼻を押さえて、顔をしかめます。夏では体験できない世界です。

雪と共に生きる子どもたち

北国を雪に閉じ込められたという感覚でとらえると、その暮らしぶりや子どもたちの遊びがもつ豊かさ

をイメージすることは難しいかもしれません。確かに雪は生活をするうえで支障となることが多いといえます。冬タイヤで走る車が往来する横断歩道は、小さいころに遊んだ雪玉割りの雪玉ほどにツルツルで、何人もの人が転倒して病院に搬送されます。木や石炭で暖をとった時代は石油や電気に代わり、昔の子どもたちが体験した石炭運びの手伝いは姿を消しました。スイッチを入れると部屋が暖かくなるという体験は、子どもの世界から何か大事なものを喪失させているように思えます。でも、寒い中お母さんと連れだつて登園する子どもたちや、雪にまみれて手袋や帽子にびっしりと雪を付けて、頭からゆげがでるほど遊んできて保育園に戻ってくる子どもたちを見ると、子どもたちが雪という自然と共生する柔らかなたくましさに共感を覚えます。雪を単に邪魔なものとして排除するのではなく、生活の中で雪を受け止めて生きる構えが、この小さな子どもたちに宿されていることを思います。

(札幌 大谷地たかだ保育園園長)